やまなし女性の知恵委員会

教育の推進班

『生きる力』をはぐくむ多様な教育の推進

～コミュニティが学校をつくる～

提案の構成

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　提案
　１「教育の推進」の前提～生涯教育体系～
　２『生きる力』をはぐくむ多様な教育
　　１)サバイバルスキル教育
　　２)ふるさと山梨の資源の郷育学習の充実
　　３)開かれた学校をつくる施策
　　４)個別対応教育の充実
Ⅲ　おわりに

Ⅰ　はじめに

　女性の知恵委員会「教育の推進」班は１０名のメンバーで６月から９月にかけて合計５回の検討会を持ち、議論を重ねてきました。
　周知のとおり教育は国の根幹に関わる重要な分野であり、文部科学省、山梨県教育委員会、各市町村の教育委員会など関係省庁自治体の揺るぎない組織の中で教育理念や目標が定められています。
　一方、教育の推進は身近で関心が深いテーマでもありますので、国や県の理念と整合性を図りながら、独自性のある提案をすべく、文字どおり委員全員が知恵を絞りました。
　その結果、これからの教育は、学校だけが担うのではなく、学校、家庭、地域の三者が情報や問題点を「共有」し、「連携」及び「協働」し、より良い教育の実施や問題の解決に向けた自立的な関係を結ぶことにより、良質なコミュニティを形成し、このコミュニティが「生きる力」を育む多様な教育を推進すると考え、この考えを実現するための施策を提案いたします。

Ⅱ　提案

　私たちは、学習指導要領に記載されている「生きる力」に加え、『生きる力』を『“変化に対応する力”“経験から学ぶ力”“自ら考え、行動する力”』と定義づけ、この『生きる力』を育む多様な教育について、コミュニティを機能させる仕組づくりと具体的な施策を次のとおり提案します。

1　「教育の推進」の前提　～生涯教育体系～

学校教育を「生涯にわたる学習環境を備えた体系」としての「生涯教育」の一部と位置づけることが重要です。

先に述べたとおり、これからの教育を担うのは、学校・家庭・地域の三者による共有・連携・協働が基本になりますので、学校教育だけを切り離すことはできません。

また、議論を重ねる中で、現在の教育委員会の縦割り組織、すなわち、学校教育と社会教育が切り離され、相互の連携が弱い現状では、私たちの提案する共有、連携、協働はうまく機能しないのではないかと考えました。

生涯教育は、社会教育の分野のみならず、学校教育と連結したものとして位置付けることができれば、様々な不具合が軽減されると考えます。

生涯教育の一環として「読み書きそろばんに象徴される義務教育（基礎教育）」→「専門能力・職業能力開発教育を目的とした高等専門教育」→「社会人として社会に貢献し生活の充実に寄与できるボランティア活動、レクリエーション活動、文化・健康・体力づくりなどの生涯教育」の流れの中で、学校教育を生涯教育の序章と捉えてみると、以下の可能性が見えてくるのではないかと考えます。

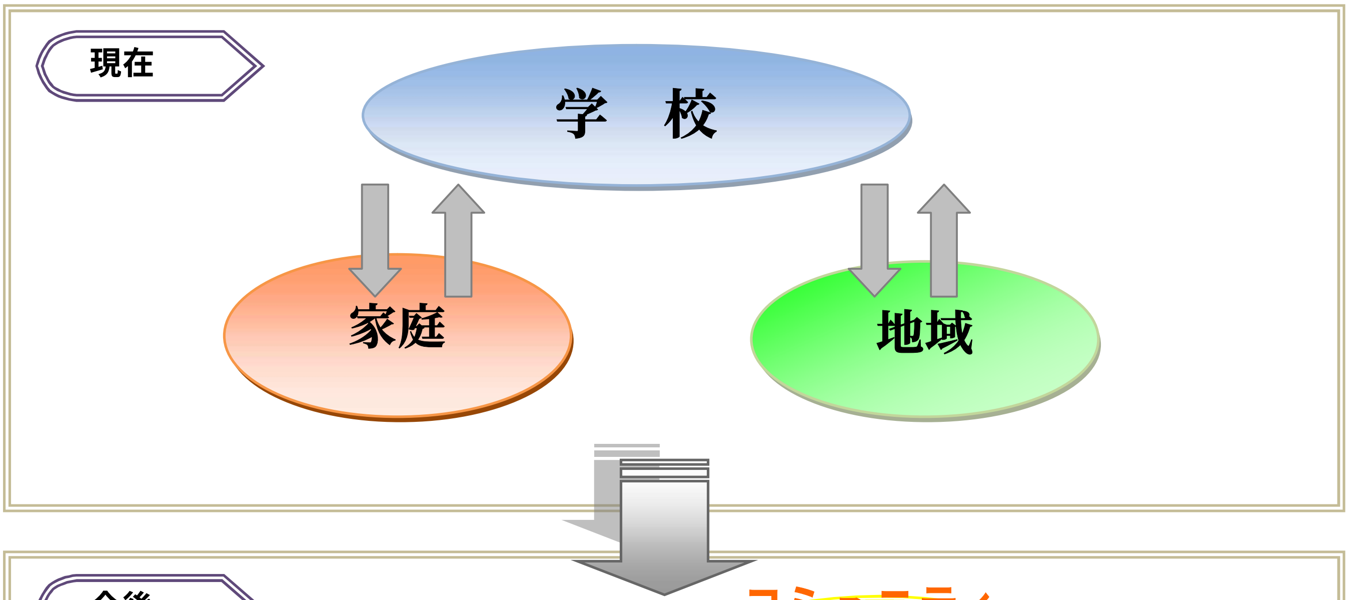
① 教育委員会、学校で行われる授業＝（生きる力の涵養）を地域と協働で多様に行えること。

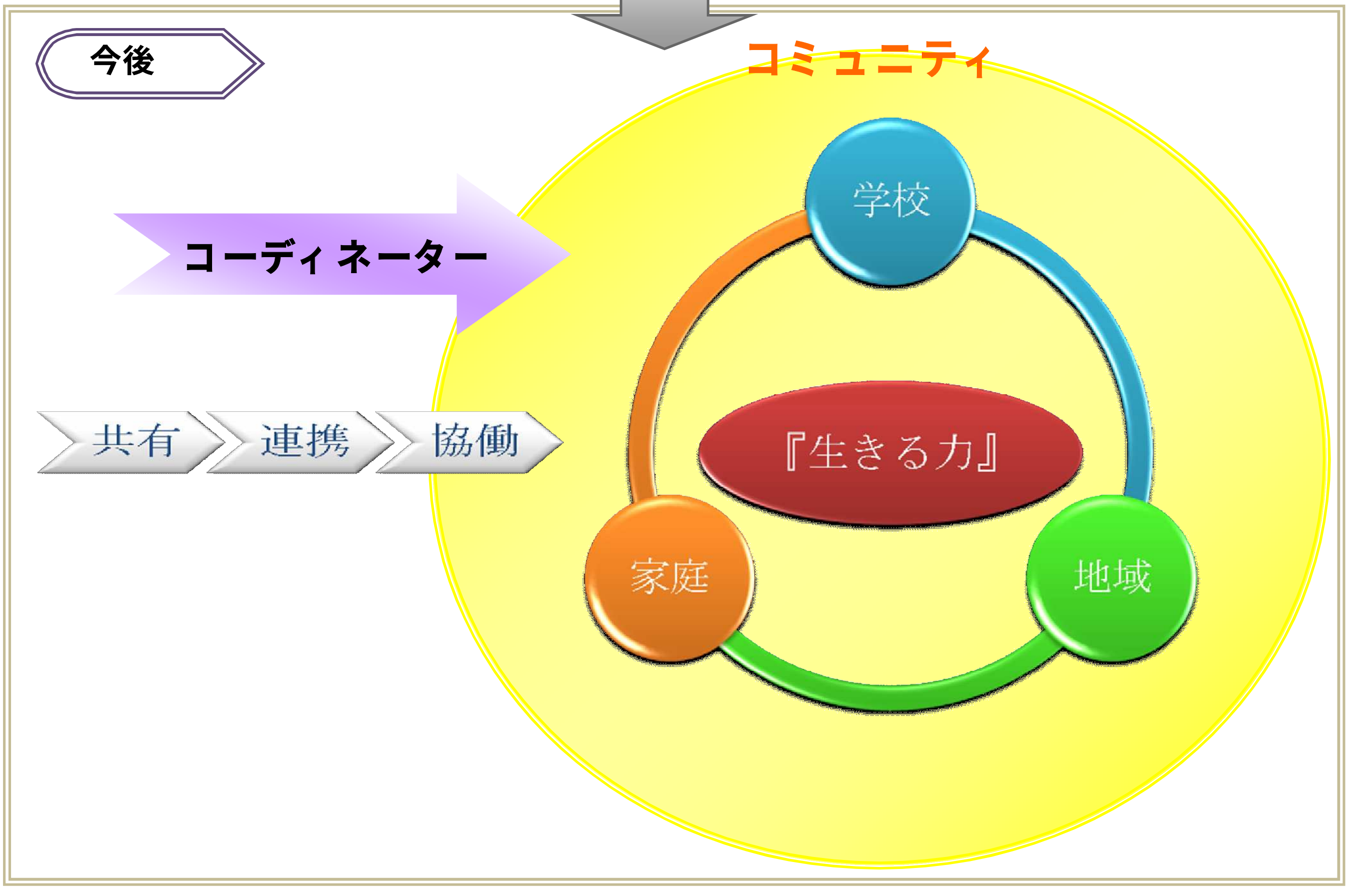
すなわち学校等からの要請だけではなく、地域からも提案できるコーディネーターを中心として、学校・家庭・地域が「共有」「連携」「協働」のキーワードで結ばれ、コミュニティを構築する構想です。

このことにより、学びの場は教室だけに限らず、地域での体験学習が可能になります。それは地域の活性化、まちづくり、環境保護・・などへの波及効果も期待できるのです。

② 生きる力の教育に手を差しのべる地域の大人たちにとっても良い教育機会になること。

生きる力の涵養を生涯教育として捉えると、教育機会、体験学習、教材、指導者、ボランティアなどの人、物、情報など教育に必要な選択肢が広がります。教師や保護者、地域社会の住民など参加する大人のすべてが生きる力の涵養に手をかすことはコミュニティが学校をつくることにもなるのです。





2　『生きる力』をはぐくむ多様な教育の提案

平成２１年度の学習指導要領の理念に「生きる力」が掲げられています。この「生きる力」は、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を示しており、生涯にわたって、育んでいく必要があるものです。しかし、学校だけで身に付くものではなく、地域一体となって、生涯をとおして培っていくべきものだと考えます。（概念図参照）

そこで、私たちは、学校教育を生涯教育の序章ととらえ「生きる力」の涵養はどのようにできるのか話し合って参りました。
しかし、学校教育が一定の年齢で試験や卒業証書の授与により完結すること、学校教育の中の一定期間の成功・不成功によるレッテル主義や学歴主義が落ちこぼれ、いじめや不登校などを引き起こしている一因になっていることを考えると、果たして生きる力が十分に涵養されるかどうかは疑問に思われます。
一方では、少子高齢化、地域社会のつながりの希薄化、ライフスタイルの個別化など社会的な環境変化が、学校への過剰な期待や負担を膨大させているのではないかと考えられます。言い換えれば、学校だけにすべてを求め、すべてを負わせている視点を変えない限り、生きる力の涵養は限定的になるのではないかと考えます。
そこで、以下のとおり具体的に提案します。

１）サバイバルスキル教育

昨今の社会環境を反映した実践教育を三者の協力で行うことを提案します。
すべての児童生徒に必要であること、現実に即した教育であること、社会の仕組みや問題に対する感性が養われることなどが目標です。
自然災害だけではなく、社会環境問題にも備えられる「サバイバルスキル」も重要な生きる力のひとつです。以下に必要な項目を挙げます。また、既に実施している関連教育についても私たちが定義する『生きる力』を育む教育体系の中に位置付けて、実施することを提案します。

①　安全教育
（例）危険回避察知能力育成教室（護身術として、リズムテコンドー等）
◇　危険に遭遇した際の技術的な能力だけでなく、状況を的確に捉え判断する力、問題を解決する力、何を選択すべきか見極める力、そして、他と協調協力していく力を身につけることを念頭に置いて実施する。地域の人材（団体）がコーディネーター（講師）として係わり、学校・家庭・地域の三者が場を共有していく。
これをきっかけに、参加者が地域の人材として新たに活動し、場を広げていくことにより、地域力（地域の安全力）だけでなく、自らをも高めていくことができる。
場所：学校
※授業参観後の懇談会、学校開放日等に実施し、地域の人も参加
対象：児童生徒、保護者、教員、地域の人
②　着衣水泳訓練、水難シミュレーション体験
③　野外生活体験（環境教育も含む）
④　災害・防災訓練、救命救急講習
⑤　薬物・煙草・飲酒関連教育
⑥　ネット犯罪予防、（携帯マナーＩＴ教育の中で実施でも可）

⑦　その他

社会情勢に応じた教育－「裁判員制度」「選挙制度」「世界同時不況」などの社会的なトピックを考える授業、教室外での体験等

2）ふるさと山梨の資源の郷育（きょういく）学習の充実

生きる力をはぐくむうえで「わが国の伝統と文化」について学ぶことは重要です。山梨ならではの宝－ふるさと資源（地場伝統産業、伝統文化・観光資源、環境）教育を生きる力の教育として実施することを提案します。

①　地場産業の活用

（例）宝飾、絹、甲州印伝、農産物、和紙・硯等の地場産業の体験学習

→　山梨県の地場産業、特産品を知り、職場体験をする。

地場産業（伝統）をとおして、過去を知り、現状について考える機会となる。県内の産業や職業に対する理解を深め、生きがいや誇りがもてるような取組となり、将来の職業について考えるきっかけとなる。

②　伝統文化・観光資源の活用

（例）子供観光ボランティアガイド（仮称）の育成に向けて

→　身近な伝統文化（地域の衣食住、祭り、史跡）や自然環境を対象に地域で育成し、徐々に活動領域を広げてゆく。将来のボランティアへの育成となる。

③　環境の活用（身近な環境から考える）

（例）給食制度を利用した食育と環境教育（地産地消）

→　学校給食に児童生徒が主体的にかかわる日を設ける。また、食材の購入から調理仕上げまで一人で行う弁当の日を設定する。地域で収穫される食材を使い、メニューを考え自分たちで作ってみる。栄養教諭や地域の食に関わる専門家の協力を得て、実施できるとよい。

「食」は生活の基本の一つである。「食」に主体的に関わることにより、地元の食材を知る、食に関する話題を家庭で共有する、食に関する仕事の体験学習、フードマイレージ等、様々な側面が考えられる。

制服・教材･文房具のリサイクル

→　PTA や地域単位で推進する。制服・学用品のリサイクルシステムを作っていく。

3）開かれた学校をつくる施策

情報、場、機能、人材など「学校」のもつすべての価値を今まで以上に地域と共有することが重要です。また、学校・家庭・地域のネットワーク化による情報の受発信の充実を図ることも必要です。加えて、家庭、地域が気軽に提案を言えるような場、

話し合う場を作る必要があります。校内で地域座談会やテーマ別座談会を行い、また、学校行事への参加等を呼びかけ、機会あるごとに相互に発信しあっていく。三者のギャップ、世代間のギャップを少なくし、共有しあい、相互に交流を深めていくことをとおし、開かれた学校づくりを今まで以上に進めることを提案します。

①ＩＴのソフトインフラの整備と充実

県内公立小中学校の情報化のハードインフラは全国でも上位に属しているが（Ｈ２０年３月現在）、小中学校のＨＰひとつをとっても、未開設の学校や内容の差も大きく、ハードが有効活用されているとはいえない。ＰＣ管理者の人材不足（個人のノウハウによる）や業務の多忙が理由と思われる。

ＨＰについては、県内の全学校に開設することが必要だ。そのために、先進事例の紹介や掲載必要項目を整理するとともに、学校の個性が感じられるように研修会を開き、県としても HP の開設と維持管理を指導することを提案する。そのことにより、掲載情報の質、活用も発展してゆくのではないだろうか。

▽ＨＰに求める項目

・緊急のお知らせ→トップページに掲載し、一目で分かるようにする
・学校長だより→学校長の考え方を家庭、地域に発信する
・学校（学級）だより→学校（学級）での日々の様子をブログ形式で発信する
・問い合わせや意見・要望を書き込めるメールアドレス→一方的なものではなく相互間のやり取りを可能にする
・中学校の区域にある小学校のリンク集（中学校のＨＰ）→通うことになる中学校の様子がわかる
・県や各市町村の教育員会のＨＰからも各学校のＨＰにリンク→地域の学校の様子を簡単に知ることができる

②学校、家庭、地域の架け橋となる機会を設定

地域の人も参加できる機会を設け、学校・家庭・地域の連携を深める。
（PTA→PTCA）
（P－Parent　T－Teacher　A－Association　C－Community）

（例）

・意見交換会→共通の気がかり、心配点を学校・家庭・地域の三者で様々なテーマで、座談会形式の意見交換会を実施する
・給食試食会→普段子どもが食べている給食を学校で試食しながら、意見交換会を実施する

③学校長への啓発研修の充実

学校運営における学校長の権限と裁量を考えると大きな可能性を秘めている。新しい発想で地域・家庭との共有、連携、協働を図るヒントやノウハウを学び、また、学校マネジメントの新しい手法なども取り入れていってほしい。

学校長次第で学校は変わるという期待がある。

４）個別対応教育の充実　～特別な配慮の必要な児童生徒への教育～

一人ひとりに目が行き届いたきめ細かい指導、子どものサインを見逃さない適切な対応、じっくりと向き合い話し合える環境が大切です。特に、障害のある児童生徒（肢体･知的）、障害が表面に現れにくい ADHD（注意欠陥・多動性障害）、高機能自閉症などの児童生徒、いじめや不登校の児童生徒への教育支援、ケアの充実は早急にすべきことではないでしょうか。

① ニーズを把握することが必要である。今、しなければならないことは、支援が必要な児童生徒の個別支援を充実していくこと、そして、同時に、取り巻く環境を整備していくことではないだろうか。

まず、一人ひとりの発達の様子を見ながら、小学校、中学校、高等学校、支援学校の連携を強化（縦の連携）し、それぞれに適した支援をしていく。同時に、支援に関わる専門家の確保とスキルアップを図っていく。また、必要な教育は何かを共に考える場を確保する。教育・医療・福祉・行政などの各分野での専門家が連携（横の連携）していくことが重要である。

② 可能な限り、障害のある児童生徒と普通学級の児童生徒との交流を進めるとともに、専門家や体験者による講演会など実施し、障害への理解促進を図る。

③ いじめや不登校の児童生徒へのきめ細やかな対応を行う。一口に「いじめ」「不登校」と言っても、原因は様々で一括りにできるものではない。

教師が一人ひとりの児童生徒に向き合うこと、そして、ソーシャルワーカー、スクールカウンセラー等の専門家を配置する等、それぞれに合った支援が必要になる。

また、子供同士の仲裁役の導入（カナダで実施）や幼少期から年長者や先輩後輩のペア指導を導入している例もあると聞くので、取組例として参考になるのではないだろうか。

新しい環境への適応、話し相手、相談などから問題解決への第一段階まで機能しており、問題を未然に防ぐ方法のひとつになり、子供同士で解決できれば、それこそ『生きる力』が身に付くことになる。

Ⅲ　おわりに

「教育＝学校」ではありません。教育は、様々な場面で行われるものであり、学校だけでなく、地域や家庭のあらゆる場面で行われるものです。学校でできること、地域でできること、家庭でできることを意識と責任を持って、それぞれの立場で行っていかなければなりません。しかし、それだけでは十分ではありません。三者がお互いに補い合い、手を携えってあっていくことが不可欠です。お互いに関わり合い、与えたり、与えられたりする中で、「育て」と同時に、「育ち」もそこにあるのだと思います。

三者が持っているものや意識を「共有」し、手を取り合って「連携」しながら、「協働」していくようなコミュニティができれば、「教育」は新たな広がりを持つことができます。そして、それこそが『生きる力』の涵養（はぐくむこと）につながるのだと思います。

やまなし女性の知恵委員会　教育の推進班　委員一同

井口ひとみ　小川はるみ　軽部妙子　河内晶さ子　高野比登美　高橋雅子
角田貴子　名取加奈子　矢崎あさみ　渡辺洋子（五十音順）

参考資料等

公式ＨＰ：文部科学省、山梨県、甲府市、南アルプス市、
「生きる力」「新学校宣言」「学校評価」「平成１９年度学校における教育の情報化の実態に関する調査結果」文部科学省
「やまなしの教育振興プラン」「高校教育」（学事出版）
その他関連新聞記事